

第三章 博士の幼少年時代

一、博士の生れたる時代

幕末多事
の形勢

博士が江戸に於ける田邊氏邸に、呱呱の聲を擧げた文久元年は、徳川十四代將軍家茂の執政後四年目の歳である。これよりさき、八年、即ち嘉永六年を以つて、米使ベルリは浦賀に來り、國論は攘夷開國の二途に彷徨して歸するところを知らず。以後、處士横議の聲は鼎の沸騰する如く所在に起つて、徳川氏三百年の威信漸く地を拂つて去らむとし、幕末の風雲愈急なるを告げた。幕府は強弩の餘勢を振つて、恐怖政治を斷行し、曩には渡邊登、高野長英、藤田東湖等勤王の志士を拉致して峻刑を加へ、後には安政の大獄を起して一舉に討幕論者を屠り盡したが、危機はこれによりて却つて促進し、民心の離散と諸藩の動搖とによつて、幕府の命脈は蹙まる一方であつた。彼の櫻田事變は萬延元年に發し、其の翌年は即ち文久元年であるのだから、當時江戸全部が如何に不穩の氣を以つて満たされて居たかは、こゝに絮説するを俟たぬであらう。

博士の生
誕せる年

幕府はこの文久元年に於いて朝廷に乞うて皇妹和宮を將軍に降嫁し、公武合體の政策を以つて、討幕の氣勢を削がむとした。然も時既に遅し。廷臣を始め勤王諸藩の志士は其の心事を喝破し、幕吏專横、天朝に迫るの不臣を、鳴して討幕の意氣を旺んにし、一方幕府はこれに對して譜代親藩の結束を堅うして、正議儒論を壓迫し、飽くまで朝廷を懷柔して柳營を累卵の危きより救はむことを策した。

山雨臻ら
むさして
風樓に滿
つ

山雨臻らむさして風樓に滿つ。苟も時勢を観るの明ある幕臣は、何人も陰慘として心を傷ましめざるを得ない。博士の生誕せるは實に斯かる時代であつた。而して其の翌文久二年八月博士の父孫次郎氏は、恰も我が國史未曾有の大事變の序曲が、黒潮の如く湧き起るを聽きつゝ、不歸の旅に急いだのである。

二、博士の母と家庭

博士の母
堂ふき子
刀自が哺
育の力

獸王を畫くものは、其の背後なる瞭亂たる花影を逸することは出来ぬ。博士を傳ふるに當つては母堂のふき子未亡人が、甲斐々々しき哺育の力を忘れて、到底それが完璧たるを望み得ないであらう。

博士の母堂は稀に見る女丈夫であつた。其の女性としての優しき情操の豊さを

こゝに説くよりも、先づ彼の女の凜乎たる氣魄と、世の誘惑に屈せざる、軟柔しなやかにして力に充てる天亶の美德とを特筆せねばならぬ。何故なら、彼の女の此の尊むべき徳操を搖籃として、博士も博士の姉君(2)も始めて障りなく成育し、天晴れ後年世に立つの素因を培はれ得たからである。

嚴堂逝いて後の田邊家の落莫はいふまでもない。古稀の齡を過ぎし祖母の君と、當歳二つの博士と、博士よりも二歳年長の姉君とが、杖とも柱とも頼むものは、漸く三十二歳のうら若きふき子未亡人ひとりであつた。假令、父祖の遺徳により糊口には窮せぬほどの家祿は受け居れるにせよ、老いたる祖母と二人の幼兒とを抱へて、後事を計らざるを得ざりし未亡人が苦心は思半ばに過ぎるでないか。

博士の幼
少年時は
所謂獅子
の仔の試
練に髣髴
す

博士は斯かる健氣の母君の乳房に縋つて生長し、斯かる薄倅の家庭に人となつた。それは博士にとりては恰も懸崖より突き落されたる獅子の仔の試練に外ならぬ。天は自ら助くる者を祐く。博士は如何にして此の試練に堪へ、如何にして此の家庭より社會に出でたであらうか。

(1) 博士の母堂ふき子刀自は幕臣花井彦四郎氏の女。

(2) 博士の令姉名は鑑子、長じて故内匠頭工學博士片山東熊氏に嫁す。

三、 戊辰事變の災厄

田邊家第
二の不幸
に見舞は
る

家長を失ひたる悲歎のうちにも、若きふき子未亡人が健氣な努力によつて、僅に門戸を張り、生計の上にも小康を得つゝありし田邊家は、突如として第二の不幸に見舞はれた。それは時代の推移に伴ひ、何人も回避すべからざる大事變の餘波をうけたものであつて、此の時博士は既に八歳となり、大久保政齋氏に就いて漢學を福地源一郎氏に就いて洋學を修めて居たのであるが、此の事變の爲に博士も姉君も、世才に長せし母君さへも衣食の資を奪はれて、一時は他國に流浪するの止むなき破目に陥つた。

戊辰の大
事變と江
戸の大不
安

事變とは外でもない。彼の戊辰の大革命である。東照宮以來無上の權威を誇つた徳川幕府も、此の年を以つて愈命盡の期に達した。幕臣最後の抗争は伏見鳥羽の戦となつて現はれたが、其の結果一層滅亡の勢を速にし幕軍大敗の後、天兵の追撃は刻一刻急を加へ、これがため、江戸一圓が今にも灰燼となるべき風説は八百八町に傳へられた。風説は更に風説を生み、流言蜚語は底止するところを知らない。然も不祥の風説はやがて否み難き事實となつた。官軍は遂に大舉して江戸ちか

くまでひた押しに押し殺氣天に沖し、人をして一大修羅場の湧出の目前にあるを想はしめた。

満街の混
亂と田邊
家の危険

江戸満街の騷擾混亂の名狀すべからざるは、もとより其のところである。難を避けむとして老幼道に轉び、右往左往に逃げ惑ふ光景は目もあてられぬ現世地獄である。さらぬも博士の一家は、父君が西洋火術を教習せし以來守舊黨の憎惡反感的たりしを以つて、斯かる騷亂に際し、如何なる殘酷の報復を受くるなきやも保し難い。殊に家を守るは女性と子供ばかりである。とすれば、此の間に處した未亡人の痛心は、眞に譬ふべくもなかつたであらう。

悲惨なる
江戸落ち
の光景

博士一家は、漸くにして多年召使つた緣故のある數人の從僕に授けられ、家具家財を無代同様の棄て値で賣拂つて、心細くも住馴れた江戸を後にすることゝなつた。落ち行く先は武州幸手在の豪農眞中林之助氏の宅であつた。氏は博士の祖父石菴先生の門下生であつたから、田邊一族はこの舊縁を頼みにしたものに外ならぬ。满目荒涼。母子相顧みて、疇昔に變りし互ひの姿に、悄然として唯涙である。

四、一家流浪中の逸事

戰國氣分の漲れる恐ろしい旅路

江戸を出でゝも、人心恟々怖しき戰國氣分は行くところとして漲らぬはない。草吹く風にも心を置き、我と我が影にも胸を轟かしては、さらぬだに馴れぬ旅路のいと遅々として渉らず。既に七日餘を費して、江戸より僅々十餘里を隔てし幸手在にも達せないで、その一里半手前の鷲の森に漸く辿り着いたのであつた。今暫し歩みさへせば、かねて志す在所に落ちついて、日頃の心痛も旅の疲勞もすこしは醫さるゝかと、吻と一息ついたばかりのところへ、又もや災厄は降つて湧いたのである。

八歳の博士の健氣の態度

その日のことである。博士は一行に先んじ從者に伴れられて、鷲の森在の一客舎に入つたが後より來る母や姉を待つうちに意外に凄じい物の音が起つてきた。何事かと小兒心に窺ふと、それは二三十人のものごもが、手に手に長槍を提げ、自ら官軍と名乗つて富豪の家を荒し廻る、怖しい一揆の類であつた。たとひ野盜であるにもせよ、官軍の名を冠かきに着て居る以上、われを幕臣の片割れと知つては、よもや無事には見免すまじと博士は刹那に覺悟した。いざと云はゞ切死をすべき覺悟である。當年八歳の博士はこの時思はず懷を探つて少さき手に懷劍の柄つかを握つたといふ。何たる剛氣な、また何といふ可憐さであらう。博士は大正六年「名士の

最も著しき幼時の記憶なる題下に、諸家の感想を集めし雜誌兒童紙上に一文を寄せたが、それは次の如く、當年博士の面目の筆端に躍如たるものがある。

博士が最も著しき幼時の記憶

頃は明治元年の春、江戸八百八町は今にも焼打になるこの風聞、老若男女の逃げ惑ふ有様は混雑の極みであつた。余の一行は婦人、子供計り、之に仲間、小者を伴ふて、十里餘りを逃けて行くに一週日の餘もかゝつた。

「いざこ云は、武士は腹を切るものぞかねて教へられて居るが此の間も指先から血が出て泣いたらおばあさんから弱虫だこ云つて叱られた、お腹を切つたらさんならう」こは當時の考であつた。落ち付く先はお祖父さんから教を受けたこ聞いて居る幸手在の豪農あ、私も武士の家に生れずさう云ふ家に生れて来たならこんな心配はないに「こ小さき胸に羨ましく思つた。彼是する内にもはや行先も一里許りに近よつて来た。先づ先づ安心、婦人、小者を後にのこし仲間は余を伴うて眞ッ先に只二人或る旅店に立寄つて様子を聞けば、昨夜は竹槍、蓆旗の一群其の豪農の家を襲ひ火を放つて財を奪ひたり。家族の行先今に不明、如何はせんこ仲間、余一人を旅宿に置き、兎も角様子を聞かんものこ一寸出掛けて行つた後、外へ出てはあぶない」こ云ふ聲が聲えた。店先きにある衝立の上から顔を出すには脊が届かぬから、横の方から覗いて見るこ竹槍を携へた二三十人の一群が軒先を通過した。

「さあ天下に安全なこころこてはなきものよ、よし来たならば切つて捨てむ」かねて懷中に潜

めて居た短刀の柄に手を掛けた。おあぶなうございます。宿の女主人は奥の座敷へ余を抱かまへて行つた。滿六年六ヶ月の兒童いざこ云ふ場合にはこんな眞似をするよりも泣いた方がはるかに有效ならむかなれども短刀をひつ攫んだ瞬間の一幕が兒童に自衛云ふ事の奥義皆傳を與へた。是が余の最も著しき幼時の記憶である。

蛇は寸にして人を呑む

あゝ蛇は寸にして人を呑む。博士が磊落なる豪氣は、八歳の幼年時既に其の恐るべき閃きを現はし、後年世界の工業史乘に印せられし光輝ある大事業の完成を豫見せしめ得て餘りあるでないか。

流浪の艱難を嘗めて漸く他人の家に寄食す

江戸の兵燹をみる

こは實に慶應四年にして、同時に明治元年たりし年四月十三日の出來事であつた。哀なる博士等一行は、漸く辿りつきし鷲の森にて唯一の力とせる真中氏が百姓一揆に襲はれ、今は其の行方さへも明かでないことを聞いて、途方に暮るゝばかりであつた。後に氏が難を避けて其の菩提所たる生蓮寺に棲まへるをきゝ、一行はそこに赴いて、漸く落ち着くことを得た。超えて五月十五日の夜、寺院の椽側より、遠く江戸の空を望めば、炎々たる焰に一天赤く焦げて鬼氣人を襲ふものがあつた。後にそれは上野中堂の兵燹に罹れるものであつて、此の夜を最後に彰義隊は全く敗れ、江戸の騒動は一先づ平穩に歸したことを知つたのであつた。

五、博士立志の一動機

明治改元
の後江戸
に歸る

彰義隊の暴動、東北諸藩の抗爭を幕末掉尾の騷亂とし、戊辰の年九月を以つて改元を見慶應を廢して新たに明治の年號を定めた。亂麻の如き天下の形勢も愈こゝに平定の緒に就き、徳川家は朝恩に霑うて封を静岡に得。博士の一家もまた歸參を許されて、始めて生計の道を與へられ、多年の愁眉を開くことゝなつた。時に明治二年である。これよりさき、既に薄倅なる母子一族は、生蓮寺の假寓を去つて、江戸に歸つて居たのであるが、住むに家さへなき窮境に陥つてさまざまの世の辛苦を嘗めさせられたのである。

博士母堂
の辛苦

田邊家の分家の當主は田邊太一氏である。博士の叔父たる氏一家が斯かる本家の窮境に際して唯一の力たるはいふまでもない。併しながら、太一氏もまた邦家未曾有の大變亂に際して、東奔西走、公事に盡し家事を觀るの暇はなかつた。これが爲に田邊氏一族は本家分家ともに婦女小兒の後に殘れるばかりであつた。されば此の間に於ける博士の母堂の辛苦の如何に大なりしかを推察せらるゝことも、斯くの如くにして博士は、早くも身世の憂患に處すべき尊き幾多の教訓を膽

沼津小學
校に入る

に銘せしめられたことを思はざるを得ぬ。

博士は家運の傾ける甚しき間、即ち十一歳まで沼津の小學校に通うて居た。それは前將軍慶喜の静岡に移さるゝと同時に、舊幕臣は一樣に濱松、静岡、沼津に配分して居住を許され、叔父太一氏は沼津の兵學校に教務を執り、従つて田邊一族は氏に伴はれて再び東京を離れ、其の地に移住して居た關係からである。而して明治四年に至り太一氏は新政府に用ひられて、外務省に任官したので、博士の家もまた翌五年に東京に轉じた。當時の子弟教育の機關は、英漢數の學を箇々別々に授ける私塾のみであつた故に、博士は東京移轉後、湯島天神下なる共慣義塾に入つてその授業を受けることゝなつた。

博士少年
時の教育

斯くして博士は、明治六年の春を迎へた。此の年は實に明治文化史の上に逸すべからざる年であり、同時に博士の一生に重大の意義を有する年である。岩倉具視を遣歐、米特命全權大使とし、約二ヶ年海外の科學文明に接觸せし一行は、此の年九月十三日を以つて歸朝した。而して此の一行には博士の叔父太一氏は一等書記官として加はつて居た。これが爲に當年の少さき博士は夥しい朝野の出迎へ人の群に交つて横濱港の埠頭に赴いた。博士が科學者たるべき立志の動機、此の

蓮舟翁の
歸朝を迎
へた博士
の感慨

日始めて與へられしことを、神ならずして誰か知らう。

博士は此の日、始めて文明の大産物たる汽船を見た。萬里の波濤を自在に蹶破する其の雄姿をまのあたりに見た。而して蒸氣機關の運轉の雄大精巧神の如きに、當年十三歳の博士は恍として我を忘れざるを得なかつたのである。

我が國に於いて電信線の架設されしは明治二年のことに屬する。然もこれすら科學文明の拓けなかつた當時の規模は殆んど云ふに足らず、外國航路の汽船の如き大交通機關に至つては僅かに繪本の類によつて覺束なき想像を馳せ、其の輪廓を腦裡に畫くの外はなかつた。斯くの如き可憐の少年は、端なくもいま岩倉大使一行を乗せたるゴールデン、エージ號の堂々たる雄姿を望見するを得て、如何に驚異の眼を輝かしたであらう。あゝまた如何に感激の情に炎えたであらう。

此の感激と此の驚異とは、自ら博士を導きて、博士をして將來の命運を拓かしむる大なる指南車となつた。編者は是に於いて、平筆を轉じて博士の六十年史に重要な意味を有する岩倉大使一行の外遊顛末を叙べねばならぬ。

博士を導
きし當年
の指南車

明治三十六年發行鐵道時報所載「鐵道家經歷田邊朔郎君」第三回之文章の中に田邊家當時の事情を傳へていふ。

江戸は平穩となりたりとの報聞えければ、もう歸りても安心なりと此處を出發したるが、この度は以前と違ひ道中大いに抄取りたりとは云へ、昨日に變る戦後の光景、悲愴慘憺として、見るからに人の腸を斷つに、況してや君の一家は更に住む家さへ無くなりたることなれば、其の感慨も亦一層であつたに違ひ無い、處で幸にも多年従僕として一方ならぬ恩顧を蒙らしめたる者の今は相當に生計を營んで居るゆゑ住むに家無く、頼るに人なき一家は、茲に身を投ずることゝしたが、偕て此の主人たるもその従僕は如何に君等を遇したであらうか、「落ちぶれて袖に涙のかゝるさき人の心の奥ぞ知らるゝ」とは善く世俗の間に口にせらるゝところであるが歌としての巧拙扱は不文の記者には知ることは出來ねども、人性の表裏頼むべからざるを説き得たるものゝやうに思はれるが、今まで祖母の愛孫として慈母の寵兒として浮世の何たることも知らざる君等姉弟に、善く此の人情に表裏することを知らしたものは愛の主人であつた、开は君等一家が斯くも不幸の境遇に陥りたるを見て、今までの忠義顔に打つて變つた輕薄の本色を露はしたばかりか舊主家の嫡子たる君を取扱ふこと、恰も一面識なき他人の厄介者と同一視の冷酷極まる待遇を爲したことである。然るに又一人の従僕たりし山本源七と云ふ者は、主家の浮沈に因つて其の志を二つにせず、東流西漂常に忠僕として赤心を捧げ、今尙生存して田邊家に出入し其の恩顧を蒙つて居る。